

一九六〇年度歴研活動総括

松 村 勝

順

一、概 観

暗く、しかも長い低迷の中から、一糸の光明をみいだした時の喜びは大きい。まさに今年度の歴研は、わずかではあるが、この喜びを得た人のごとく、剛年に見られぬ画期的な成果を獲得したと言える。もとより、このようは「転換」や「曲り筋」は、この一年向で得られたものでは無論あり得ない。かつて低迷の中にありながらも、暗中摸索のうちに、発展を希求してやまなかつた過去の歴研活動の集積があつて、はじめて得られたものである。又、この成果は明日の歴研の、より一層の発展を創造していく礎石とされるものである。

このように述べる争のできる最も基本的な、今年度の活動の成果は、なんといつても、歴研の本来あるべき姿が一応実現した点である。すなわち、歴史学の研究の場としての歴研の性格が前面におし出され、かつての有名無実化の傾向が払拭されたことである。この具體例は後述するが、度会郡城田地或綜合調査、各支部会などの活動、定例研究発表会、校刊誌「ふびと」及び「月報」、文化祭等々のめざましい活動の中によみとることができ、勿論歴研が、歴史学研究の場としての性格を保持したことは、当然のことであり、今更劇的なこと、

してとりあげらるべき事ではない。しかし、「ふびと」四号の運営方針におい

て述べた如く、かつての歴研がこの当然すべきことを実現し得なかつたからに外ならない。すなわち、自治会の下置組織としての歴研の性格があまりにも強く、現実の社会問題と取り組むことの重要性が、一方的に強調されすぎた感があつたからである。このことは、元委員長の内田口氏、九期中島氏によつても示唆されている。従つて、このような傾向が払拭され、歴研の本来的な姿が実現された事は、高く評価されてよいであろう。我々の願ひ掲げた「方向」は、一応正しかつたと言える。しかし、こうした歴研の「姿勢」が一応出来たものの、今年一年向の活動を仔細に分析してみると、幾多の反省しなげは、ならぬ点がある。そのオ一は、最も根本的な研究活動においても、なおかつ不十分な点が見出されることである。個々の秀れ

一、概 観	
二、研究活動における成果と欠陥	
1、総合調査	
2、部会活動	
3、研究発表	
4、その他	(以上本号)
(以下、次号掲載予定)	
三、歴史教育研究に關して	
四、交際斗争及び自治会活動について	
五、歴研運営上の問題点	
六、結 び	以上

た研究活動はあつても、敬発的な傾向が強く、歴研活動の中に正しく統一され、会員に普遍化されることが出来得なかつた慰がある。才三には、将来教育の現場に立たんとする我々でありながら、歴史教育に肉する研究がほとんどいつてもよいほどなされなかつた事である。歴史教育の危機が叫ばれている今日この状態は、誠に憂慮すべき事柄である。才三は、日米完全保障條約改定反対斗争において、高い熱心が示されたにもかゝらず、問題の本質を究明し、斗いの明確な展望を期すため活動が、あまりにも不十分であつたことである。これは我々のもつとも身近かな問題でもあり、未曽有の国民運動の中にあつて、我々として等閑視することの出来ぬ重要な問題である。才四に、会員の歴研に対する熱心の問題を扱はねはならない。過去において、非常にその低さが強調され、克服の方策が論ぜられて来た。今年度になつて、ようやくいろ／＼な点において高まりを見る事が出来るのは全く喜ばしいことであるが、しかし、依然として一部活動家のみの活動といつた色彩が濃く、完全にこの問題が克服されたといふことはできない。これ又如何に改善するか。会員一人一人と密着した歴研を作り上げるにはどうしたらよいのか。根本的な対策を講ずる必要性を痛感せざるを得ない。その他、言いつくせぬ点もあるが、このような点が今年度の活動の中から主じた反省すべき点であろう。

以上、簡単に概観したわけであるが、次に個々の活動の子細を報告し、その成果と欠陥を示すと共に、更には、今後に残された課題をあきらかにしたい。

x
x
x
x

二、研究活動における成果と欠陥

1、綜合調査

昨年一月、当時の運営委員会の提案で、多気、度会両郡にまたがる外城田一帯をとり上げ、歴史的にこの地域を明らかにしようとして企てられたのがこの綜合調査である。

以来、古代・中世・近世の各史部会を中心に調査がつけられ、今日に至つてゐる。この調査に肉して前委員長中島登良男君は、一九五九年度の総括の中で次のように言つてゐる。

「これは従来、歴史学研究の場として歴研という存在が忘れ去られたという反省から出された問題であり、会員の共通の場を求めようとしたものにならず、この調査を通じて会員の歴史意欲の向上を期待しようとしたものに立脚してゐた」

この言葉の如く、綜合調査は本年度の歴研活動の中核を形成した。とりわけ、非常に多くの参加者を得、会員の共通の場が形成されたことは、大きな収穫であつた。又、会員自身がこの調査の中にあつて多くのものを学びとつたといふことは、一つの成果である。最近、地方史研究が必髮視されている折でもあり、かつまた、三重県における歴史学研究の低潮が意識されている時にあつて、この調査によせられる期待は大きいものといえる。従つてこの企ての価値は少なからぬものがあるのである。しかし、このよう大きな意義を認めながらも、今年一年の成果をみつけてみる時、その不十分さをかくす事はできない。古代は昨年三月の才一回の調査だけで、その後他の活動のために継続することが出来ず、才二回の調査は本年三月に持ち

懸している、才一回の調査結果は、文化寮において発表されたが、主として出土品の展示に終り、この地域の系統的な発明はほとんどなされてない。あえて言えば「踏査」の段階である、中世は、当地に史料が少いの下、神宮文庫に残されている史料を手がかりに研究が進められた。だが、これも古代と同様三月の才一回のみの調査に終り、文書の書写をしたにすぎない。この調査結果は「ふがと」十四号に発表されている。近世はこれに比して、非常に意欲的な活動がつけられ、三月、五月、八月と三回にわたつて、中村家所蔵文書の書写にあたり、十一月文化寮において史料展を開いている。しかし、これも書写の段階でとままっている。但し、この文書を利用して二、三研究発表がなされていることは注目すべき事である。

ところで、我々の計画は一応今年度において、すくなくともある程度の成果をまとめようと意図していただわけであるが、この計画は失敗に帰したことを認めねばならない。この計画の失敗の才一の原因は、我々の見通しがあまりにも甘かつた事である。着実な実践計画を組み立て得なかつたことが、最大の原因である。それに加えて古代、中世、近世といつた調査部門の統一がとれず、しかも、共同討論の機会をもち得なかつたことをあげなければならぬ。このような大調査が、一年間で出来るということとは無論考えられないことであり、長い目でみる必要があることは言うまでもない事である。この反省の中から、一体これからどうして行けばよいのであろうか。

それには先ず、根本的に調査方法を再検討してみる必要が要であらう。それには、各支部会の主体性にだけたよるのでなく、

なく、歴研の中に調査委員会を設置し、具体的に推進していくことを考えなければならぬ。その中で目的と方法を具体化した実践の方途を見出していくべきである。このことにおいて、最も注意しなければならぬことは、近世史部門において見られた如く、研究を個人的な研究にのみ解消せず、あくまでも統一的なもの求めていかねばならない。又、調査結果はいつも会員に普遍化する必要があり、資料集を逐一出して行く事によつてそれを活かさるべきだと思われる。又、総合調査という見地から当然、近代・現代の研究がなされなくてはならず、この点が解明されてこそ、真に対象地域の解明が果されるものである。地理クラスを始め、その他のクラスの協力を得て、社会科学のものとしていく方法も、又考えられ得る希望である。ともあれ、今年度の活動の成果の上に、より一層の積み重ねがなされ、調査完成を期することが、目下の我々の急務である。

2. 部会活動

歴研活動の最も基本的な役割を演じているのは、いうまでもなく各部会の活動であり、今年程部会活動の重要性が認識された年はなかつたと云える。とりわけ綜合調査の母体となつたのはこの部会であり、又輪読会なども期別とか、仲間同志とか言うようなブルース主義ではなく、部会を中心にして行われることが多かつた。

その活動には、確にみる活発さが認められる。古代史部会にあつては、総合調査以外に、服部貞蔵先生指導のもとに、四日市岡山吉煮発掘調査（才一次七月）八月、才二次十二月、才三次二月）、伊賀上野市三田虎寺跡発掘調査（一月）二月）

四日市々東日野古墳の南山大学との合同調査(三月)などの活動が見られ、非常に大きな成果を収めている。これと併行して「日本書紀」の輪読会も週一回宛継続され、又発掘技術の訓練も行っている。二十名程の会費参加者があり、特に十二期生の参加が目立っている。工場建設等のために、古墳がとんとく破壊されていく傾向が著しく、前述の調査も各市教育委員会などの依頼によるものである。まさに東奔西走の貌があり、この活動の中にあつて、会費相互の仲向つくりも順調であり、学びとる事の多い点など誠に何等批判の余地がない。唯ともすれば、史部会独自の狂走がみられ勝ちであり、歴研の下部組織である以上は、活動の成果を歴研全体のものとして還元させていく必要があろう。その意味において、調査結果などはその都度まとめていく必要があり、資料集の作成の労を怠つてはならないであらう。近世史部会は、中田四朗先生指導のもとに、毎週木曜日の史料講読が続けられている。とりわけ近年の近世史部会は綜合調査の方に全力を注いでおり、山神村中村家所蔵の莫大な史料と取り組んでいる。それ以外は自立した活動はなく、昨年まで継続されていた太閤検地論の輪読会なども、本年は行つていない。この点いろいろ都合はあるにもせよ、史部会としての独自性ある活動が、本年度はみられなかつたことは、残念なことである。四十人近くの会費を有するこの史部会であるだけに独自のユニークなものを用ひて行く必要があらう。西洋史部会は、ほとんどその活動はなく、輪読会が時々持たれているにすぎない。会員の少い点もあるが、一段と積極的な活動が望まれる。とくに、史観の勉強などは、日本史をやる者にとつても

必要不可欠のものであり、こつした分野において西洋史部会の会員による指導の余地が感されている。それに、西洋史部会に参加しているからと言つても、日本史の分野に無関心であることは反省さるべき点であり、綜合調査などに対しても、積極的な参加があつてよいと思われる。懸案であつた中世史部会の成立は、一応六月集会において可決されたのであるが、残念ながらその活動は全くない。これは我々運営委員の指導性の欠陥として自己反省しなければならぬ点である。中世を研究する人の増加しつつある状態にかんがみて、是非共軌道に乗つた活動が望まれてならない。綜合調査の完成のためにも、中世史部会の活動は、最も必要な事である。

これら史部会には、ほとんどの会員が参加しており、どれかに属していることは誠に喜ばしいことであり、これからの歴研活動も、この史部会活動を中心に進めて行かねばならない。従つて、各史部会の指導にあたる人は、たえず建設的に活動の展開を果すべきであり、又、セクト主義に陥ることなく、会費相互の仲向依りを果しつつ、その活動を進めて行つてもらいたいものである。

3. 研究発表

研究発表の場としては、今年度その実見を見た月一度の定例研究発表会、及び検肉誌「ふびと」がある。今年は九期、十期を中心にすぐれた研究成果が見られ、そのために報告が多く、研究発表会も一応成功を収め、「ふびと」も充実したものを依ることが出た。

研究発表会は、四月村田輝文君による「紀州藩における地士

制度についてははじめとして、五月寿裕子さん、中田正彦君、六月名古屋樹君、十一月松永光義君等々の研究報告が行われ、いすれも五十人近くの盛会であつた。一月に入つて辛論の発表会が始り、九期生全員を四回にわけて発表してもらつた。この会の成功は稱筆されてよいものである。一、ふびとしも十四、十五、十六の三号の刊行が見られ、元美化の傾向が著しい。無論両者共、玉石混合という評判はあつたけれども、これだけのことがなし得られたということは、高く評価されるべきである。又、参加者が非常に多かつたことは、会員の歴史意識の向上と如実に示すものである。良い面はどんく伸ばされていつていゝものである。しかし何と言つても研究活動が大切なことであり、この研究活動が充実すればする程、報告の場的重要性も高まるであらうと信じる。

5. その他

その他の活動として、まず文化祭をあげなくてはならない。今年度の文化祭は成況で、総合調査の報告展を中心に、古代は服部貞蔵先生の指導で古墳からの出土品の陳列、近世は中田先生の指導で中村家文書の陳列を行つた。それに加えて服部貞一先生の御努力で、社会科学統計図表展、拓本展が行われた。学内の他のクラスの展示会の低調さもあつて、一段と学内文化祭の旺巻であつた。学生の多くの参加に加えて、一般の参加も目立ち、成功のうちを終ることができたわけであるが、この成功のには、三月〜四月に行つた総合調査の努力があつたことと忘れてはならないであらう。又、志摩高筑紫先生の「三重県古代史の向題点」の講演があり、吾々会員にとつて、多く啓蒙

されるところがあつた。

次に、サークル活動の動向であるが、いろいろは意味で注目されていた十期の輪読会が、会員の中から多く歴史の役員になつた者がありそのために中止されざるを得ず、ようやく十二月になつて再南された。しかし再会後のこの会は、新書の研究会に姿を変じ、主として思想向題、社会向題を取扱うに至つてゐる。十一期は「新日本史のカギ」をテキストに活動をつゞけ、十二期の一部会員は、近世史料解読のための講演会を行つてゐる。いづれも意欲的なものが見られ、仲間依りをしていく上に大きな力となつてゐる事を認めねばならない。しかし、専門的な歴史研究のために、どれ程大きな力となつてゐるかは、甚だ疑問であり、単に「仲間依り」だけのための輪読会であるとするのは向題であらう。更に一歩すすんで、高度なものにとりくむ勇気をもつてこそ、本當の進歩・向上が成り得るのであるのではないだろうか。輪読会の存在意義は、個人では読むことの困難な書物を、集団の共同討論によつて読んでいく、難かしいものも解決していくところにある。従つて昨年度の「西洋経済史」「日本農業史」等の輪読会はその最も価値あるものであつた。しかし本年度は、そうした意欲的なものが見られずに終つた事は、何としても残念な事である。輪読会の発発な動向の中にこそ、歴研を動かす底流がある事を我々口知らなくしてはならない。その他いろいろ迷へるべき事があるが、大体以上のような点において研究活動の成果と欠陥が認められるのではないかと思われる。尚不十分な点は、次号にて補つつもりである。又、目次の三、三、四の点については、紙数の制限上、次号に掲載する予定である。

——次号につゞく——